審査の結果の要旨

氏名　大森　万美

本研究は食道癌に対する根治化学放射線治療において、従来の ENI（全食道照射）と比較して IFRT が許容されうる照射法であるかを検討することを目的としたものであり、下記の結果を得ている。

1. ENI の 121 症例と IFRT の 120 症例について OS、LC、DFS を単変量解析、ステップワイズ法による多変量解析を用いて比較した。その結果、LC について両解析法において有意に IFRT 群の成績が良好であったことが示された。OS、DFS については両群に有意差はなかった。さらに ENI 群と IFRT 群の 2 年・3 年・4 年・5 年の OS、LC、DFS について各群の平均値と標準誤差の値から IFRT 群が ENI 群と比較して非劣性である確率を算出し、全ての時点において IFRT 群が十分に非劣性であることが示された。
2. プロペンシティスコアマッチング法を用いて抽出された 220 人について ENI 群と IFRT 群で OS、LC、DFS の比較を行い、LC について IFRT 群が有意に成績良好であることが示された。OS、DFS について有意差はなかった。
3. 治療の有害事象については、グレード 4 以上の重篤な急性期有害事象は ENI 群で発生率が高くなっていた。またグレード 3 以上の急性期有害事象についても IFRT 群の方が頻度は低く、特に食道炎は IFRT 群で有意に少なくなっていた。
4. 初回再発部位に関して、両群ともに初回再発部位として最も多かったのは GTV 内再発で、次に多かったのが遠隔転移再発であった。IFRT 群での照射野外所属リンパ節再発が 2 例（4%）であり、いずれも 106RecR の再発であった。

以上、本論文では食道癌の根治化学放射線治療において IFRT が従来の ENI と比較して同等以上の臨床成績であり、再発についても許容される結果となった。また、治療関連有害事象については IFRT 群で軽減された。これらの結果から IFRT は ENI と比較して許容されうる照射法であることが示された。現時点で食道癌の根治化学放射線治療における照射野についての明確なコンセンサスはなく、本研究の結果は食道癌の放射線治療における最適な照射野設定、臨床成績の向上に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。